

# 外国人患者に安心感を



診察を受ける謝丹丹さん(奥)と医師(右)の間で通訳する郭静儀さん=8月、大阪府泉佐野市のりんくう総合医療センター

8月上旬、りんくう総合医療センター(大阪府泉佐野市)の産婦人科。岸和田市在住で妊娠中の謝丹丹さん(25)が「食べるごむかむかして吐いてしまう」と中国語で医師に訴えた。通訳の郭静儀さん(49)

日本語ができない患者が安心して治療を受けられるよう支援する医療通訳の活躍が期待されている。日本を訪れる外国人が増え、2020年の東京五輪開催を控えて需要が高まるのは確実だ。積極的に取り組む病院があるほか、国や東京都も対応に乗り出した。

## 需要高まる医療通訳

### 観光客増、五輪…国も対応急ぐ

が日本語に訳すと、医師が「無理に食べなくていいので、水分を十分取ってください」と答え、郭さんが中国語で伝えた。謝さんは近所の病院では中国語が通じず困っていた時、医療センターを紹介された。「細かい質問にも答えてもらえるので安心」とほほ笑む。

#### ■見る側

通訳は医師にとっても



重要だ。同センターでは65人の有償、無償のボランティアが活動する。国際診療科部長の南谷かおりさんは英語やスペイン語でも診察するが「正確な診断や患者が理解しているか確認するには通訳が欠かせない」と話す。センターで通訳に支払われる報酬は1日5千円と交通費。「さらに高い報酬と身分を保障する仕組みが必要」と南谷さん。法務省によると、在留外国人の数は約200万人(13年末)。政府観光局の集計では、13年に日本を訪れた外国人旅行者は1千万人を突破した。厚生労働省は本年度、全

東京都も外国人患者に対応するため、本年度、都立病院で看護師や事務職員向けに語学研修をしている。問診票の記入方法の説明や症状を聞くときに必要な英会話を外国人講師から学ぶ。8月中旬に都立広尾病院で行われた研修では「予約のない患者への対応を想定、看護師や薬剤師ら8人が案内役と患者役に分かれて練習した。オーストラリア人講師は「身ぶりも交えると、伝わりやすい」と助言した。

#### ■勉強会

医療現場での通訳は高い語学力やとっさの機転を指摘している。事務局の高山喜良さんによると、通訳の基本は「足さな、引かない」。がんの告知や難しい手術の説明はベテランが担当する。りんくう総合医療センターでポルトガル語の通訳をする野口徹宏さん(67)は、フラジル勤務時代、子どもが病気になる、現地の医大生に助けられた恩返しのため通訳を始めた。血を見るのが苦手で、医学の知識もなかったという野口さん。「間違つと大変なので、専門用語は必ず医師から説明を受けている。緊張するが、感謝されるとうれしい」と話した。